

CONTENTS

HEADLINE NEWS

名古屋大学レクチャーを開催 ①
院長からのメッセージ ②

ABOUT IAR

高等研究院のミッション ③

ABOUT IAR

高等研究院の学術活動 ③

IAR NOW

高等研究院の組織 ④

IAR RESEARCH PROJECT

高等研究院研究プロジェクト紹介 ⑥

IAR INFORMATION

これまでの活動報告・ニュース ⑧

IAR INFORMATION

国際交流について ⑮

IAR INFORMATION

受賞ニュース ⑰

HEADLINE NEWS

名古屋大学レクチャーを開催

ドナルド・キーン博士を名古屋大学レクチャーラーとして迎える



名古屋大学レクチャーシップ授与式の様子



講演の様子



<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>

高等研究院は2002年度に名古屋大学学術憲章に掲げた学術研究を推進するため設置されました。学術憲章に掲げられているように日本の基幹・総合研究大学である本学の基本目標は世界屈指の知的成果を産み出すことです。高等研究院は、この基本目標の達成のために、学内アカデミーとして真に優れた研究を推進し、それを本学の構成員各位と共有するとともに、優れた研究成果を多様なレクチャーやセミナーを通じて学内外に紹介していくことを活動の基本としていきたいと考えております。この方針に基づき、これまでは、「高等研究院アカデミー」の指導を仰ぎながら、高等研究院研究プロジェクトの実施を検討するとともに、名古屋大学レクチャーの開催など学術活動を推進し、さらに本学の次世代を担う研究者の育成のため「高等研究院研究者育成特別プログラム」(テニユアトラック制度)の実施などを進めてきました。今後に残された課題は、高等研究院研究プロジェクトの更なる充実と、高度な学問的背景に基づく研究者

高等研究院の課題

間の恒常的な交流を進め、学内アカデミーとしての活動を充実させることです。このため、新たにキャンパスの中心部に高等研究院の学術交流の場を設けたいと思っています。また研究を目指す若手を支援する Young Leaders Cultivation プログラムの推進も重要な課題の一つです。

一方、トップレベルの頭脳循環のハブ拠点を形成する目的で、近年、世界の研究型大学においては、学内高等研究院を創設する動きが加速化しています。分野を超えて互いの知を集結・触発し、最高レベルの学術研究を促進するうえで、高等研究機構は極めて有用であることは海外では広く認識されております。これらの世界の高等研究院とともに、グローバルな活動を推進することも大きな課題です。言うまでもなく、高等研究院の活動は学内の構成員の皆様の積極的参加があって初めて達成できるものです。どうか高等研究院に対するご支援とご協力をお願いする次第です。

2012年3月



高等研究院長
近藤 孝男
Takao KONDO

ABOUT I.A.R.

高等研究院について
<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/>

高等研究院のミッション

高等研究院は、名古屋大学の学術の発展のため以下の3つの活動を基本とする。

1. 名古屋大学の学内アカデミーとして、優れた研究を名古屋大学の構成員に紹介し、それを共有することで、学術の振興をはかる。
2. 特に優れた研究に対して実質的な支援を行い、名古屋大学の研究の飛躍的向上をめざす。
3. 若手研究者の自立支援を積極的に推進し、将来名古屋大学の中枢を担う研究者を育成する。

これらの活動を基礎とし、大学執行部に対して研究推進のための提言を行う。またグローバルCOE等のプロジェクトおよび各研究科の大学院教育に協力する。さらに、学外の高等研究院組織と交流を図りながら、名古屋大学の研究を広く社会に発信する。

高等研究院の学術活動

■レクチャー、セミナー、講義

名古屋大学に真に優れた研究を紹介し、学術の振興をはかるため、以下の講義等を開催する。

1 名古屋大学レクチャー

名古屋大学の最も重要な学術講義として位置づけ、学外にも積極的に公開する。世界トップレベルの研究者を招へいし、名古屋大学総長がホストとしてレクチャーシップを授与する。

2 高等研究院レクチャー

学内教員、大学院生を対象とする高等研究院の最も重要な学術講義として位置づけ、学内外の特に優れた研究を採り上げ、全学の積極的な参加を要請する。学外にも公開する。

3 高等研究院セミナー

若手研究者、大学院生の研究推進のためのセミナーとして、最前線の研究、研究の個人史、研究倫理と公正研究等を採り上げ、若手研究者の研究活動を支援する。

4 高等研究院初年次講義「学問の面白さを知る」

初年次学生(1年生)を対象とし、アカデミーメンバー、高等研究院教員、院友、学内教員等の講義で構成され、学問の面白さや研究に対する心構えを知ることが目的とする。

■研究推進

1 アカデミー研究室

アカデミーメンバーの希望に応じ、研究室、実験室、談話室等を準備するとともに、関連部局の協力も依頼しながら、研究・教育活動を支援する。

2 高等研究院研究プロジェクト

特に優れた学内外の研究者を高等研究院教員として選考し、高等研究院において研究プロジェクト(プロジェクト期間:5年)を推進する。候補者の推薦はアカデミーメンバーおよび運営推進委員の他、学内からも随時受け付ける。高等研究院会議で候補者を調査、審議し、プロジェクト提案を依頼し、ヒアリング、アカデミーの承認を経て採択する。高等総合研究館において研究スペースを用意し、協力する特任教員、研究費を提供する。

3 高等研究院テニュアトラックプロジェクト

将来名古屋大学の研究を担う研究者を、高等研究院テニュアトラックプロジェクト教員として、採用し、支援する。セットアップ費用、研究費等を支援し、高等総合研究館において研究スペースを確保する。

4 名古屋大学若手育成プログラム

～YLC(Young Leaders Cultivation)プログラム～

名古屋大学若手育成プログラムは、名古屋大学において、教育・研究を将来にわたり継続的に発展させるためには、若手教員、特に助教クラスの質的、量的な確保が重要であることを踏まえ、大学全体として継続的かつ計画的に若手教員を採用、養成するために実施する戦略的なプログラムである。採用者は、3年間研究と教育の研鑽を積み、国際的経験も兼ね備えた研究者・教員として自立することを目指す。



名古屋大学レクチャーの様子

高等研究院の組織

平成24年3月1日現在

高等研究院名誉院長



理化学研究所理事長・名古屋大学特別教授

野依 良治

2001年 ノーベル化学賞受賞
不斉合成法の確立



ICSU会長・名古屋大学名誉博士

李 遠哲

1986年 ノーベル化学賞受賞
化学反応素過程の動力学的解明

高等研究院アカデミー

(五十音順)



名古屋大学特別教授

赤崎 勇

2004年 文化功労者顕彰
青色発光ダイオードの発明



名古屋大学特別招へい教授

飯島 澄男

2009年 文化勲章受章
カーボンナノチューブの発見



名古屋大学特別教授

岸 義人

2001年 文化功労者顕彰
複雑な天然有機化合物の全合成



名古屋大学特別教授

小林 誠

2008年 ノーベル物理学賞受賞
小林・益川理論の提唱



大学院文学研究科特任教授

佐藤 彰一

2002年 日本学士院賞受賞
テキスト科学の創始



名古屋大学特別教授

下村 脩

2008年 ノーベル化学賞受賞
緑色蛍光タンパク質(GFP)の発見



名古屋大学特別教授

杉浦 昌弘

2009年 文化功労者顕彰
植物葉緑体ゲノムの全塩基配列の決定



名古屋大学特別教授

竹市 雅俊

2004年 文化功労者顕彰
細胞接着分子「カドヘリン」の発見



名古屋大学特別教授

中西 香爾

2007年 文化勲章受章
機能性天然有機化合物の発見



名古屋大学特別教授

野依 良治

2001年 ノーベル化学賞受賞
不斉合成法の確立



名古屋大学特別教授

益川 敏英

2008年 ノーベル物理学賞受賞
小林・益川理論の提唱

高等研究院教員

高等研究院研究プロジェクト

所属部局・職名/氏名	研究プロジェクト名	採択年度
高等研究院アカデミー会員、大学院文学研究科特任教授 佐藤 彰一	中世世界システムとグローバル・ヒストリー	平成23年度

タイプ1(世界最高水準プロジェクト研究)教員

所属部局・職名/氏名	研究プロジェクト名	採択年度
大学院医学系研究科・教授 貝淵 弘三	細胞の極性形成を制御する分子機構の解明	平成19年度
大学院理学研究科・教授 篠原 久典	新規ナノカーボン物質の創製、評価と応用	平成19年度
大学院理学研究科・教授 福井 康雄	サブミリ波からテラヘルツ帯に至る宇宙と地球大気の開拓的観測研究	平成19年度
大学院理学研究科・教授 森 郁恵	行動基盤となる神経回路の分子生理学	平成19年度
物質科学国際研究センター・教授 阿波賀 邦夫	分子磁性体における非線形電子物性の開拓	平成19年度

タイプ2(萌芽的・独創的な若手プロジェクト研究)教員

所属部局・職名/氏名	研究プロジェクト名	採択年度
大学院理学研究科・准教授 戸本 誠	エネルギーフロンティア実験による新素粒子の発見	平成20年度

高等研究院会議メンバー

基幹教員

高等研究院長
大学院理学研究科 教授
近藤 孝男

高等研究院副院長
大学院経済学研究科 教授
安藤 隆穂

高等研究院副院長
大学院工学研究科 教授
福田 敏男

高等研究院専任教員 准教授
斎藤 進

高等研究院副院長
大学院理学研究科 教授
杉山 直

高等研究院専任教員 准教授
蔡 大鵬

運営推進委員

大学院文学研究科 教授
釘貫 亨

大学院多元数理科学研究科 教授
金銅 誠之

副総長(研究・国際企画関係担当)
物質科学国際研究センター 教授
渡辺 芳人

大学院環境学研究科 教授
黒田 達朗

大学院医学系研究科 教授
宮田 卓樹

中世世界システムとグローバル・ヒストリー

Medieval World System and Global History

プロジェクト期間：平成23年度～平成27年度

本研究課題は二つの基軸を有している。それらは表題にある「世界システム」と「グローバル・ヒストリー」という二つのテクニカル・タームで表現されている。「世界システム」という概念は、もともと15世紀後半以後のヨーロッパ先進国の近代的な不均等発展をベースに、近代的覇権システムを支えるべく生成された、優れた近代的な地域間統合システムとみなされている。だが「世界システム」は元来近代に固有な歴史的現象とは言えない。近代を遥かに遡る時代から、近代システムとは別種の「世界」システムが機能していた。例えばローマ帝国が最盛期にあった西暦1、2世紀の交易活動は、ローマを基軸にした地中海交易が、紅海、インド洋、南シナ海、東シナ海といったそれぞれ分節化されていた交易とリンクし、漢帝国を東の端とする交易ネットワークとして機能し、漢からは陸地を経て、ウイグル、チベット、パルティア帝国、パルミラ、東地中海海港都市へと通ずるいわゆるシルクロードがもう一つの経路を構成する東西交渉機構の存在が想起される。確かにこの時代には、新大陸は孤立した世界で、他には知られずもっぱら旧世界を枠組みとするシステムではあったが、こうした空間的な限界性は、「世界システム」という用語を用いるに際して大きな障害にはならない。なぜなら、新世界を欠いてはいるが、旧世界の人類の生存条件はそのようなものとして現前し、そうした所与の空間性のなかで、諸文明を連結するシステムを構築していたからである。このような複数の文明の連なりを一体のものとして律動させたそれぞれの時代的条件、「文化の興亡」の条件を明らかにしてくれる。そのような意味で近代以前に「世界システム」を云々することは、何らアナクロニズムではないし、19世紀に起こった社会進化論が、往々にして胚胎させがちな、知的に自由な歴史的展望のための阻害要因を無化する上で重要な、発想上の転換となる。

グローバル・ヒストリーに関する最新の概論『グローバル・ヒストリーとは何か』(2008年)を著わしたバメラ・カイル・クロスリーは、次のように述べている。「事実を発見し、史料により掘り起こされた歴史を結びつけるといった第一次的作業は、グローバル・ヒストリーを実践する歴史家の仕事ではない。彼等はむしろ他の歴史家たちが行った研究に抛りながら、比較を行い、概括的なパターンを記述し、人類史すべての本質と意味を解き明かす変化を理解する筋道を提案するのである」と指摘し、それが歴史学というよりは歴史社会学に属することを強調している。グローバル・ヒストリーが指向する学問的目的は、文明

史的な指向を具えた本プロジェクトに極めて適合的であることは、容易に理解できよう。

発想の面で社会進化論の宿痾を克服し、方法論的には歴史社会学の方法に学び巨視的な視点で、近代以前の諸文明間を連貫する共時的なシステム律動を捉えることが、本プロジェクトの目的である。

すでに触れたように、旧来の歴史観は余りに社会進化的パースペクティブに囚われていた感があり、近代以前の人間の知的営為を低く評価し、その社会的達成を評価する認識論的な視座を欠落させていた。それは多かれ少なかれ、欧米を始めとする諸外国の学問世界にも共通する欠落である。日本における以上に海外の歴史研究は、対象時代が古くなればなるほど、視野は地域、あるいはせいぜい近代に形成された国単位であり、これを越えた文明圏もしくは間文明圏的な広がりを持たなかった。本プロジェクトは、近代以前の諸文明圏を単一の实体ではなく、それら相互を結びつけて一つのシステムと捉えて、そのような所与のシステムが他の時代のシステムとどのように異なり、その差異は何に由来するかを問おうとする点にある。

こうした方法的発想に根ざした研究は、いまだ限られており、国際的にインパクトを有することは論をまたない。先述したグローバル・ヒストリーの考えが定着するに連れて、言わば世界システム論のもつ学問的、知的可能性についても認識が深まるに違いない。この課題についての研究技術上の特性は、共同研究という点にある。古今の世界中の文明に通暁することは、ひとりの学者の知的筋力を遥かに超える。それぞれの文明に通暁した内外の個性的な研究者の共同での作業が必須のものとなる。当初は限られた若手研究者を協力者として、申請者が専門にしているポスト・ローマ時代の西欧文明圏、および隣接するビザンティン、ペルシャまでの近東文明圏のシステム連関の解明を課題として設定し、順次、インド、中国と共時的連関を探求する予定である。

ポール・サミュエルソンの『文明の衝突』が、わが国でも大きな反響を呼び、文明研究の必要が声高に叫ばれながら、学術的根拠を具え、明瞭な展望を持った文明研究が提示されなかったのは、「文明」という極度に抽象化された概念にアプローチするための有効な方法が見いだせなかった点に、その大きな原因がある。その有効な「切り口」となるのが、申請者によればシステム論的アプローチである。或る文明が減じ、ある文明が新たに起こるのは、個々の文明に内在する価値要因

佐藤 彰一

SATO Shoichi

高等研究院アカデミー会員、大学院文学
研究科特任教授、日本学士院会員、フ
ランス学士院連携会員



プロフィール

- 1969年 早稲田大学文学研究科修士課程(西洋史専修)入学
- 1969年 フランス共和国カン大学人文学部留学
- 1971年 早稲田大学文学研究科復学
- 1973年 早稲田大学文学研究科博士課程(西洋史専修)入学
- 1976年 早稲田大学文学研究科博士課程単位取得
- 1978年 日本学術振興会奨励研究員
- 1979年 愛知大学法経学部助教授
- 1984年 バリ第10大学客員研究員
- 1987年 名古屋大学文学部助教授
- 1991年 名古屋大学文学部教授
- 2009年~ 名古屋大学大学院文学研究科特任教授

受賞歴

- 2001年 エク・サン・プロヴァンス大学客員教授
パリ社会科学高等研究院(EHESS)客員教授
コレージュ・ド・フランス招聘教授
- 2002年 日本学士院賞
- 2003年 プリンストン大学歴史学部招聘講演
- 2004年 バリ第1大学招聘教授
- 2005年 バリ第4大学ハビリテーション(教授資格)審査会委員

代表的研究業績

1. 佐藤彰一、『修道院と農民 一会計文書から見た中世形成期ロワール地方一』、名古屋大学出版会、1997年(2002年度日本学士院賞受賞)
2. 佐藤彰一、『ポスト・ローマ期フランス史の研究』、岩波書店、2002年
3. 佐藤彰一、『歴史書を読む 一『歴史十書』のテキスト学一』、山川出版社、2004年
4. 佐藤彰一、『中世初期フランス地域史の研究』、岩波書店、2004年
5. 佐藤彰一、『中世世界とは何か』、岩波書店、2008年

というより、所与の時代における各文明が担ったシステム連関上の役割によるところが大きい。とすればそれぞれのシステム連関の歴史的、時代的個性に内在する理論と指向性を解明することによって、その連関の中にある個々の文明の適応性と、非適応性を評価することができる。

申請者は2008年に『中世世界とは何か』(岩波書店)と題する著書を上梓した。その序論において、「中世を切り出す」と題して、いわば「ヨーロッパ中世」という世界を文明圏として位置づける作業を行ったが、それはむしろ専門の歴史研究者に属さない、だが現在われわれが生きている時代の歴史的位相がいかなるものかについての切実な問いかけを行っている識者や、経営者から肯定的な評価を得ることができた。申請者は歴史家であり、歴史学の目的と方法への愛着は人後に落ちないと自負している。それゆえ史料研究に基づく歴史研究は今後も継続するが、同時にそうした成果をさらに巨視的なレベルで文明論的に問い直す作業もこれと並行して実践したいという強い願望を持っている。

さらに最近では「ポスト・ローマ期ヨーロッパにおけるシリア人およびシリア問題」と題する論考を完成させた。そこでは4世紀から繁栄を極めたシリア地方がなぜ7世紀に経済的に急速に衰退したかを議論したが、それはオリーブ油生産が全地中海的需要を掘り起こし、労働力需要が高まり、急速な人口成長を実現したものの、これがマルサスの危機を呼び覚まし、何よりも当時の技術水準の条件のもとで、生産力が頭打ちとなり、脱出不可能な袋小路に入り込んでしまったと論じた。北シリア台地に累々とその屍を曝す当時の豪華な石造りの農民家屋は、フランスのシリア史の専門家ジョルジュ・タトによれば、それはブレークスルーの技術を持たなかった、豊かな富の果実を家の建築に過剰投資せざるを得なかった7世紀シリア社会の文明条件を表象していたのである。



背景：麒麟(名古屋大学レクチャーシップ表彰楯のモチーフ)、西 大記、2006

麒麟は、古来の想像上の瑞獣で知恵の象徴でもあり、最も傑出した人物を表すものとされてきました。麒麟の出現は、聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆であるとい伝えられてきました。画家の西氏によれば、今こそ麒麟が出現し、世界が平和になり、学問が発展するように、との祈りを込めて制作したとのこと。

これまでの活動報告・ニュース

名古屋大学レクチャー2012 「日本文学と日本文化をめぐって語る」を開催

名古屋大学レクチャー2012「日本文学と日本文化をめぐって語る」が、平成24年2月11日(土)、豊田講堂において開催されました。

今回の講演者は、日本文学研究の第一人者であり、文化勲章受章者のドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授でした。キーン博士の仕事は多岐にわたりますが、能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎などの演劇を文学史に組み入れることを特徴とし、文学をはじめ日本文化全体について極めて優れた言論を展開してきました。

当日は、濱口総長のあいさつで幕をあげ、その後、安藤隆穂高等研究院副院長が、レクチャーの趣旨と講師の先生方を紹介しました。続いて、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎研究の第一人者の鳥越文蔵早稲田大学名誉教授、早大演劇博物館顧問が、「日本文化における芸能」と題し、キーン博士との親交のエピソードに触れながら、浄瑠璃「曾根崎心中」等に関するキーン博士の業績について紹介しました。

引き続き、キーン博士が、「世界の中の日本文学」と題し、日本文学が翻訳を通じていかに世界に広まってきたのか、また世界の文学と共に日本文学がいかに発展したのかについて、自身の研究生生活を振り返りながら、日本書紀から村上春樹までの日本文学の歴史やその魅力について、分かりやすく解説されました。

続いて名古屋大学レクチャーの称号の授与式ならびに表彰楯の贈呈式が執り行われました。総長からキーン博士に「聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆」とされる「麒麟」をモチーフにデザインされた名古屋大学レクチャーシップの表彰楯が贈呈されました。最後に、佐藤彰一高等研究院アカデミー会員によるレクチャー全体の総括があり、大盛況のうちに終了しました。

今回は、本学教職員、一般市民等の方々など1000名以上が参加し、熱気溢れる講演会となりました。参加者からは、「感銘を受けた」、「心に響く講演でした」との感想が多数寄せられており、大変有意義なものとなりました。



■プログラム

名古屋大学レクチャー 2012

「日本文学と日本文化をめぐって語る」

日時 2012年2月11日(土(祝))

会場 名古屋大学豊田講堂

主催 名古屋大学

14:30~14:40 開会あいさつ

濱口 道成 名古屋大学総長

14:40~15:00 趣旨と講師紹介

安藤 隆穂 高等研究院副院長

15:00~15:40 講演

「日本文化における芸能」

鳥越 文蔵 早稲田大学名誉教授、早稲田大学演劇博物館顧問

16:00~17:00 名古屋大学レクチャー

「世界の中の日本文学」

ドナルド・キーン 博士

17:00~17:15 名古屋大学レクチャーシップ授与式

17:15~17:30 総括

佐藤 彰一 高等研究院アカデミー会員、文学研究科特任教授

第7回高等研究院レクチャー

「素粒子質量起源の謎に迫る」を開催

第7回高等研究院レクチャー「素粒子質量起源の謎に迫る～坂田昌一先生誕生100年と素粒子宇宙起源研究機構(KMI)の創設」が、平成23年11月9日(水)、理学南館坂田・平田ホールにおいて、本学教職員、学生や一般の方々など約200名の参加を得て開催されました。レクチャーは、杉山直高等研究院副院長の司会により進められ、まず、益川敏英本学特別教授・素粒子宇宙起源研究機構長が、素粒子物理学を先導した元本学理学部長である坂田昌一博士の生誕100周年を記念し、「坂田先生の生誕100年にあたって」と題して、博士の業績をわかりやすく解説し、「議論は自由に、研究室では平等だ」といった坂田博士の理念を紹介しながら、自由闊達な議論を行うことの重要性を強調しました。次に、棚橋誠治素粒子宇宙起源研究機構基礎理論研究センター長・教授が、「KMIでの素粒子論研究：素粒子質量起源の謎」と題し、KMIの組織及び目標を紹介するとともに、現在の素粒子標準理論の抱える未解決問題、特に素粒子質量起源の謎について、「何が問題なのか」、「どのような解決が考えられるのか」、「それらがどのように検証されるのか」という観点から面白く解説しました。最後に、青木保道同センター准教授が、「高性能計算機システム・ファイで素粒子の質量起源の謎に挑む」と題し、素粒子物理で謎となっている素粒子の質量生成機構の解明を挑んでいる高性能計算機- ϕ (ファイ)による研究最前線について講演しました。それぞれの講演後には、活発な質疑応答が行われ、熱気溢れる盛況となりました。



■プログラム

第7回高等研究院レクチャー

「素粒子質量起源の謎に迫る」

日時 2011年11月9日(水)

場所 名古屋大学理学南館 坂田・平田ホール

主催 名古屋大学高等研究院

共催 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構

名古屋大学物理系グローバルCOE「宇宙基礎原理の探求」

16:30~16:35 開会のあいさつ

國枝 秀世 名古屋大学大学院理学研究科長

16:35~17:15 講演

「坂田先生の生誕100年にあたって」

益川 敏英 名古屋大学特別教授、素粒子宇宙起源研究機構長

17:15~17:55 講演

「KMIでの素粒子論研究：素粒子質量起源の謎」

棚橋 誠治 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構

基礎理論研究センター長・教授

17:55~18:35 講演

「高性能計算機システム・ファイで素粒子の質量起源の謎に挑む」

青木 保道 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構

基礎理論研究センター 准教授

18:35~18:40 閉会のあいさつ

近藤 孝男 名古屋大学高等研究院長

第6回高等研究院レクチャー

「環境学という学問を創る」を開催

第6回高等研究院レクチャー「環境学という学問を創る」が、平成23年3月29日(火)、野依記念学術交流館2階カンファレンスホールにおいて、本学教職員、学生や一般の方々など約150名の参加を得て開催されました。レクチャーは、神沢博大学院環境学研究科教授の司会により進められ、まず、グローバルCOE拠点「地球学から基礎・臨床環境学への展開」の拠点リーダーである安成哲三地球水循環研究センター教授が、「地球学から基礎・臨床環境学への展開」のめざすものと題して、地域の環境の診断と治療に責任をもってあたる「臨床環境学」、また臨床を支える共通の基盤を地域の問題をまたいで構築していく「基礎環境学」のコラボレーションによって拓かれる最先端の環境学の創成や研究成果についてわかりやすく紹介しました。次に、中塚武同研究科教授が、「人間社会は気候変動にいかに対峙できるか：高分解能古気候学を通して、歴史に学ぶ」と題し、気候・環境変動に対峙できる人間社会の在り方について、最新の気候変動研究の事例を織り交ぜて解説しました。続

いて、横山智同研究科准教授が、「ラオスの環境問題：森林資源・人間活動・環境政策の諸相と動態」と題し、ラオスの農山村地域における自然と人間との相互関係およびその変化について講演しました。引き続き、加藤博和同研究科准教授が、「人にも環境にもやさしい交通システムと地域づくりを目指して」と題し、低炭素型の交通システム・都市空間構造の理想像について、名古屋市をはじめ各地での低炭素型都市計画や地域交通計画の具体例を交え、面白く講演しました。それぞれの講演後は、活発な質疑応答が行われ、熱気溢れる盛況となりました。



■プログラム

第6回高等研究院レクチャー

「環境学という学問を創る」

日時 2011年3月29日(火)

場所 野依記念学術交流館 2階カンファレンスホール

主催 名古屋大学高等研究院

共催 名古屋大学環境系グローバルCOE

「地球学から基礎・臨床環境学への展開」

15:00~15:05 開会のあいさつ

15:05~15:25 講演

グローバルCOEプログラム

「地球学から基礎・臨床環境学への展開」のめざすもの

安成 哲三 名古屋大学地球水循環研究センター教授、地球生命圏研究機構長、グローバルCOE「地球学から基礎・臨床環境学への展開」拠点リーダー

15:25~16:05 講演

「人間社会は気候変動にいかに対峙できるか：高分解能古気候学を通して、歴史に学ぶ」

中塚 武 名古屋大学大学院環境学研究所 地球環境科学専攻教授

16:05~16:20 休憩

16:20~17:00 講演

「ラオスの環境問題：森林資源・人間活動・環境政策の諸相と動態」

横山 智 名古屋大学大学院環境学研究所 社会環境学専攻准教授

17:00~17:40 講演

「人にも環境にもやさしい交通システムと地域づくりを目指して」

加藤 博和 名古屋大学大学院環境学研究所 都市環境学専攻准教授

17:40~18:05 総合質疑・討論

18:05~18:10 閉会のあいさつ

第3回高等研究院サロン

「ES館オープン記念第2弾・クリスマス特別イベント：ノーベル物理学賞 益川敏英特別教授が贈る特別記念講座【CP対称性とは?】を開催

第3回高等研究院アカデミーサロン「ES総合館オープン記念第2弾クリスマス特別イベント：特別記念講座「CP対称性とは?」が、平成23年12月27日(火)、ES総合館において、独立行政法人科学技術振興機構との共催で開催されました。

「高等研究院アカデミーサロンシリーズ」は、高等研究院アカデミー会員が次世代の若者等に直接に「世界最高知」や「有識者の見識」を伝える企画として、定期的で開催しているものです。今回は、大住克史社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センターサイエンス・コミュニケーターの司会のもと、益川敏英本学特別教授・高等研究院アカデミー会員が、抽選で選ばれた高校生と大学生計20名と一緒に昼食を取りながら自由に議論する「ランチオン・フォーラム」を実施しました。益川特別教授が、参加者に「自由な発想」の重要性を語り、英語勉強や留学の大切さについても助言しました。最後に、「物理学ではまだまだ分からないことが多いので、ぜひ参入してほしい」と期待を述べました。

続いて、青木保道素粒子宇宙起源研究機構准教授が「対称性と素粒子」と題して、CP対称性について分かりやすく講義しました。その後、参加者は、理学研究科素粒子宇宙物理学専攻N研究室およびF研究室で行われている素粒子に関わる実験の風景を見学しました。最後に、近藤高等研究院長から参加者へ、益川教授直筆サイン入り修了書が授与

されました。参加者からは、「一人一人の質問に丁寧に答えてくれるとは思ってなくて大変よかった」、「本当によい経験になった」との感想が多く寄せられました。

ES館オープン記念第2弾 クリスマス特別イベント
ノーベル物理学賞 益川敏英 特別教授が贈る
特別記念講座
CP対称性とは?
第1回講座 12:00~14:00
益川教授との「ランチョン・フォーラム」
第2回講座 14:30~16:30 (50分×2回)
対称性と素粒子
実験室見学 16:30~17:30
2011年12月27日(火) 12:00~17:30
名古屋大学 Engineering & Science (ES) 館
講座料 ¥800

■プログラム

第3回高等研究院サロン

「ES館オープン記念第2弾・クリスマス特別イベント：
ノーベル物理学賞 益川敏英特別教授が贈る
特別記念講座 【CP対称性とは?】」

日時 2011年12月27日(火)

場所 名古屋大学 Engineering & Science (ES) 館

主催 名古屋大学高等研究院

協力 (独) 科学技術振興機構 /

名古屋大学サイエンス・コミュニケーション推進室

12:00~14:00 第1回講座

益川教授との「ランチョン・フォーラム」

14:30~16:30 (50分×2回) 第2回講座

「対称性と素粒子」

青木 保道 名古屋大学素粒子宇宙起源研究機構・准教授

16:30~17:30 実験室見学



益川先生を囲んで

第2回高等研究院サロン

「下村先生とYLC教員との懇談会」を開催

第2回高等研究院アカデミーサロン「下村先生とYLC教員との懇談会」が、平成23年10月3日(月)、本部1号館において開催されました。

今回は、米国より一時帰国し本学を訪問していた下村脩高等研究院アカデミー会員、本学特別教授とYLC (Young Leaders Cultivation) プログラムに採用されている若手研究者ら関係教員による懇談会であり、世界最高水準の研究や研究者の育成を可能にする仕組みづくりについて活発な意見交換を行いました。なお、本学を訪問していた中川正春前文部科学大臣と濱口総長も今回のサロンに参加しました。



下村先生ご夫妻を囲んで

第1回高等研究院サロン

「ES館開館記念特別講座ランチョン・フォーラム【不斉とは?~基礎講座】~右手と左手の分子たち」を開催

第1回高等研究院アカデミーサロン「ES館開館記念特別講座ランチョン・フォーラム: 不斉とは?~基礎講座~右手と左手の分子たち」が、平成23年8月1日(月)~3日(水)、野依記念物質科学研究館において開催されました。

初日では、大矢 恵社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センターサイエンス・コミュニケーターの司会のもと、野依良治本学特別教授・高等研究院アカデミー会員が、抽選で選ばれた高校生と大学生計17名と一緒に昼食を取りながら自由に議論する「ランチョン・フォーラム」を実施しました。野依特別教授が、参加者に「自分が新しい問題を作り、解いていくことの重要性」を語り掛けました。また、生きている実世界のすべて体感・理解し、「暗黙知」を身に着けることの大切さも強調しました。最後に、「青春を賭けて、やりがいがあることにぜひ挑戦しなさい」と参加者にエールを送りました。

2日は、齋藤進高等研究院准教授が「分子の右と左: 野依教授の足跡と化学で挑む21世紀の重要課題」と題して、また3日は、中寛史物質科学国際研究センター助教が、「不斉合成の最先端+α」と題して、講義しました。最後に、近藤孝男高等研究院長が、3日間通して参加した参加者に野依教授直筆サイン入り修了書を授与しました。参加者からは、「人生で2度ないぐらいすごい経験だった」、「大変感動した」との感想が多く寄せられました。

■プログラム

第1回高等研究院サロン

「ES館会館記念特別講座ランチョン・フォーラム【不斉とは?~基礎講座】~右手と左手の分子たち」

日時 2011年8月1日(月)~3日(水)

会場 名古屋大学野依記念物質科学研究館

主催 名古屋大学高等研究院

協力 (独) 科学技術振興機構

名古屋大学物質科学国際研究センター

8月1日 12:00~14:00

野依教授との昼食会「ランチョン・フォーラム」

8月2日 (第1回講義) 13:30~15:30

「分子の右と左: 野依教授の足跡と化学で挑む21世紀の重要課題」

齋藤 進 名古屋大学高等研究院・大学院理学研究科准教授

8月3日 (第2回講義) 13:30~15:30

「不斉合成の最先端+α」

中 寛史 名古屋大学物質科学国際研究センター助教



ランチョンフォーラムの様子



野依先生を囲んで

名古屋大学 野依良治特別教授 研究室が贈る
ES館開館記念 特別講座
ランチョン・フォーラム 参加無料

名古屋大学が誇る2001年ノーベル化学賞受賞
 野依特別教授 研究室が ES館開館を記念して
 特別講座を開きます

【不斉とは?~基礎講座】
 ~右手と左手の分子たち~
 ~野依教授との足跡と化学で挑む21世紀の重要課題~

8月1日 名古屋大学 野依記念物質科学研究館
 2011年8月1日から3日(3日間)
 高校生相当、および大学生(定員18名)
 名古屋大学高等研究院
 独立行政法人 科学技術振興機構
 名古屋大学物質科学国際研究センター

8月1日 野依教授とのランチョン・フォーラム(12:00~14:00)
 昼食を取りながら、野依教授との対話を楽しんでいただきます。
 講座のテーマ以外の質問も歓迎します。

8月2日~3日 不斉とは?~基礎講座(13:30~15:30)
 講師: 野依特別教授 齋藤進 准教授、中寛史 助教
 講師と質疑応答、および質疑応答時間があります。
 質疑応答は日本語でご連絡ください。

HP! <http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/academy/>よりお申し込み下さい。(7月15日締切)
 締切後は、その日の17:00にアクセスして下さい。
 ※3日連続でご参加いただけます。
 ※最終日に野依特別教授のサイン入り修了書と修了書を授与いたします。
 ※応募者数が多い場合は抽選となります。
 ※抽選結果は当該講座にご連絡いたします。

〒466-8601 名古屋大学高等研究院事務局
 TEL: 052-788-6153 E-mail: iar@post.fmu.nagoya-u.ac.jp

全学教養科目「学問の面白さを知る」が開講された

高等研究院は、昨年度に引き続き、4月から、毎週火曜1限に、経済学部カンファレンスホールにおいて、全学部の1年生を対象とした全学教養科目「学問の面白さを知る」を開講しました。

この講義は、本学に入学したばかりの学生が、高等研究院に所属する（あるいはかつて所属した）優れた研究者の講義を聴講することにより、学問の面白さや研究に対する心構えを知ることが目的としています。講義は3つの単元から構成されており、地球、生命、環境、材料から歴史、教育、社会までの幅広い話題について、基礎知識から最先端の内容までわかりやすく紹介し、学問を楽しんでもらうことをねらっています。毎回、定員300名いっぱいの受講生が熱心に講演に耳を傾けています。高等研究院は、この講義シリーズを自らの啓発活動の一環として位置づけており、同講義の専用ホームページ(http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/Activities_Programs/IARgakumon2011.html)を開設しました。そこには、講義を担当する各先生の個人・研究室のページへのリンク、毎回の講義資料、実際の講義風景を収録した映像のファイル、写真および優秀レポートなどを公開してあります。

高等研究院全学教養科目 学問の面白さを知る

主担当教員名：高等研究院 副院長 安藤 隆穂 教授

第1単元「宇宙と地球環境」

目標 人間を取り巻く宇宙・地球環境の中で人間が生存していくためにそれらの環境について深い知識を学ぶ。

H23.4.19 第1回

「科学、発展の法則」

益川 敏英 名古屋大学特別教授/KMI素粒子宇宙起源研究機構 機構長

H23.4.26 第2回

「暗黒の宇宙に迫る」

杉山 直 大学院理学研究科 教授

H23.5.10 第3回

「原子・分子の流れをとらえる」

新美 智秀 大学院工学研究科 教授

H23.5.17 第4回

「地球温暖化をどう考えるべきか」

安成 哲三 地球水循環研究センター 教授

第2単元「歴史、教育と社会」

目標 人間が歴史の中でどのように学び、それをどのようにして後世に伝え、また、どのように現代社会が運営されているのかについて学ぶ。

H23.5.24 第5回

「歴史的事実と歴史の構築」

佐藤 彰一 大学院文学研究科 特任教授

H23.5.31 第6回

「思想史入門の魅力」

安藤 隆穂 大学院経済学研究科 教授

H23.6.7 第7回

「経済とは何だろうか？」

黒田 達朗 大学院環境学研究科 教授

H23.6.14 第8回

「社会的正義とは」

和田 肇 大学院法学研究科 教授

H23.6.21 第9回

「不況と国際収支危機」

奥村 隆平 大学院経済学研究科 教授

第3単元「生命と物質」

目標 人間・動物の命の営みとその自然環境との関わりについて学ぶ。

H23.6.28 第10回

「ベンチ(研究)とベッド(臨床)」

高橋 隆 大学院医学系研究科 教授

H23.7.2 第11回

「時を測るたんぱく質について」

近藤 孝男 高等研究院長・大学院理学研究科 教授

H23.7.5 第12回

「DNAはなぜ右巻きか 化学からのアプローチ」

八島 栄次 大学院工学研究科 教授

H23.7.9 第13回

「生理活性物質の科学と生物学」

坂神 洋次 大学院生命農学研究科 教授

H23.7.12 第14回

「科学は視ることから始まる」

飯島 澄男 名古屋大学特別招へい教授/名城大学大学院 教授

YLC教員が中川前文部科学大臣へ提言を提出

YLC教員等が、平成23年11月29日(火)、中川正春前文部科学大臣へ提言を提出しました。これは、中川前大臣が10月3日(月)に本学に来訪した際に、若手研究者から具体的な提言を期待する旨の発言があったことを受けて実現したものです。提言は「博士を活かす国づくりに向けて一名大若手研究からの提言」と題し、新たなキャリアパス・キャリアの変更などについて、テニュアトラックについて、博士研究員(ポスドク)について、科研費について、大学院について、さらなる取り組みの6点からなっています。

当日は、濱口総長陪席のもと、YLC教員等有志5名が、文部科学大臣室において提言書を提出し説明を行いました。中川前大臣は提言書を受け取り、今後の日本の大学の在り方などについて考えを述べ、現行制度の枠内で出来ることは対応し、今後、若手教員の意見を吸い上げる機会を設けることについて前向きに考えたいと話しました。その後、吉田統彦衆議院議員や文部科学省若手職員などとの意見交換会も行われました。



提言を説明する様子

高等研究院研究者育成特別プログラム (テニュアトラック制度)、最終評価を受ける

2006年度科学技術振興調整費「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」の一環として採択された「名古屋大学高等研究院研究者育成特別プログラム」(テニュアトラック制度)は、この度、5年間のプロジェクト期間を終了し、科学技術振興機構(JST)による最終評価を受けました。同プログラムの期間中において、高等研究院は、自立して高度な研究を推進できる若手研究者を育成するために、テニュア候補者を国際

公募・選考し、自由な研究環境を与え、予め部局と合意した審査基準に沿って評価し、部局にテニュア付与について推薦するシステムを構築しました。また、「名古屋大学若手育成プログラム(YLCプログラム)」を発展させた新たなテニュアトラック制度「YLC-t」を確立させ、本学におけるテニュアトラック制度の普及・浸透に努めました。こうした取り組みが評価され、「総合評価」で「A評価」を受けました。

YLC-tプログラムが始動 ~YLC-t(Young Leaders Cultivation Tenure-Track)プログラム~

本学は、文部科学省の科学技術人材育成費補助事業「テニュアトラック普及・定着事業」の支援を受け、高等研究院が中心となり、次世代を担う若手研究者を育成するための「名古屋大学若手研究者育成・テニュアトラック(YLC-t)プログラム」を実施しています。平成23年度は、理学研究科、情報科学研究科及び医学系研究科の応募が選定され、公募の結果、理学研究科は61名、医学系研究科は26名、情報科学研究科は5名の応募がありました。書面審査、審査委員会審査及び面接審査を実施し、下記のとおり、採用者2名を決定しました。

氏名	受入部局
西山 朋子	大学院理学研究科
島田 和之	大学院医学系研究科

採用された若手研究者には、独立した研究スペースと良好な研究環境が与えられます。2015年度に実施する最終審査において期待どおりの研究成果を挙げたと評価されれば、本学のテニュアを取得できます。

平成23年度と平成24年度名古屋大学若手育成プログラムの採用者が決定される ~YLC(Young Leaders Cultivation)プログラム~

平成23年度と平成24年度の名古屋大学若手育成プログラム(YLCプログラム)については、それぞれ54名と32名の応募があり、YLC審査委員会による厳格な書類審査および濱口総長、近藤高等研究院長を

はじめとするヒアリング審査委員によるヒアリング審査を経て、下記のとおり、将来を期待できる若手研究者を採用しました。

平成23年度 名古屋大学若手育成プログラム採用者

氏名	受入部局等
進藤 有一郎	大学院医学系研究科
中 竜大	現象解析研究センター
中道 範人	大学院生命農学研究科
野川 晃佑	大学院工学研究科
河内 美樹	大学院生命農学研究科
田村 康	大学院理学研究科

平成24年度 名古屋大学若手育成プログラム採用者

氏名	受入部局
吉田 健太	エコトピア研究所
高橋 長秀	大学院医学系研究科
伊藤 照悟	大学院生命農学研究科
大森 有希子	大学院理学研究科
POOTAWANG Panuphong	グリーンモビリティ連携研究センター

同プログラムは、名古屋大学において、教育研究を将来にわたり継続的に発展させるためには、若手教員、特に助教クラスの質的、量的な確保が重要であることをふまえ、大学全体として継続的かつ計画的に若手教員を採用、養成するために実施する戦略的なプログラムです。YLC教員は、採用期間中(3年間)において、研究と教育の研鑽を積み、終了時には国際的経験も兼ね備えた研究者・教員として自立できることを目指します。また、相互に切磋琢磨と交流の場として、総長や高等研究院長等も出席する、YLC教員によるセミナーを1、2カ月に1回程度の頻度で開いています。本学の独自の若手研究者をインカレレッジするためのプログラムとして、若手研究者の間に広く注目されています。

国際交流について

高等研究院が大学付属高等研究院国際連盟(UBIAS)の運営推進会議のメンバーとして選出

高等研究院が大学付属高等研究院国際連盟(UBIAS)の運営推進会議のメンバーとして選出されました。

近年、世界的な知の競争が激化する中、高等で新たな知の創造のために、異分野間の知的な触発や融合を促す環境の整備が不可欠であることから、世界の主要な研究型大学が競って学内高等研究院の設置を果たしています。そうした中、平成22年10月に、フライブルク大学において第1回大学付属高等研究院国際会議が招集され、大学付属高等研究院国際連盟(University-based Institutes for Advanced Study: UBIAS, <http://www.ubias.net/>)を発足させました。

UBIASの活動を一層促進するために設置された同運営推進会議(Steering Committee)は、下記の11の機関より構成されています。

1. ステンボッシュ高等研究院(Stellenbosch IAS)、アフリカ
2. サンパウロ大学高等研究院(São Paulo IAS)、南アメリカ
3. ブリティッシュコロンビア大学ピーターウォール高等研究院(Peter Wall IAS)、北アメリカ
4. スタンフォード大学人文科学研究センター(Stanford Humanities Center)、北アメリカ
5. 復旦大学社会科学高等研究院(Fudan IAS)、アジア
6. 名古屋大学高等研究院(Nagoya IAR)、アジア
7. エルサレム・ヘブライ大学高等研究院(IAS Jerusalem)、中東
8. 西オーストラリア大学高等研究院(IAS Perth)、オセアニア
9. ヘルシンキ大学高等研究院(Helsinki IAS)、ヨーロッパ
10. フランス高等研究院(Réseau français des instituts d'études avancées (RFIEA))、ヨーロッパ
11. フライブルク大学高等研究院(FRIAS)、ヨーロッパ



UBIASのロゴ

近藤院長がフライブルク大学高等研究院を訪問

近藤院長は、渡辺副総長らと共に、平成23年6月8日(水)～10日(金)の3日間、「日本デー」に参加するため、フライブルク大学および同大学高等研究院(FRIAS)を訪問しました。「日本デー」は、日独交流150周年の記念行事の一環として、本学の学術交流協定校であるフライブルク大学との共催で開催したものです。

「日本デー」前日は、近藤院長、渡辺副総長らは、フライブルク大学高等研究院を訪問し、同院のヘルマン・グラバート副院長らより、同院の活動状況について説明を受けるとともに、同院の研究施設を視察しました。また、「日本デー」の初日において、近藤院長から高等研究院の活動状況についてプレゼンテーションが行われました。



プレゼンテーションを行う近藤院長

安藤副院長らが復旦大学社会科学高等研究院を訪問

安藤副院長と蔡基幹教員が、平成23年6月25日(土)～6月26日(日)の日程で、復旦大学社会科学高等研究院が主催する国際会議「激変する世界における人文社会科学的研究：挑戦と新領域の創出」に出席しました。安藤副院長は「The Rise of French Liberalism: French Reading of Adam Smith」と題して、フランス自由主義の成立について講演しました。また、蔡基幹教員が、「Confronting the Dark Side of Growth: Economic Analyses on Social Problems Generated by Economic Growth」と題して、経済成長がもたらす諸問題の経済分析について講演しました。なお、最終日には、復旦大学社会科学高等研究院において、世界大学付属高等研究院連盟(UBIAS)の会議も開きました。



講演する安藤副院長

南京大学人文社会科学高等研究所周憲院長一行が来訪

南京大学人文社会科学高等研究所周憲院長、王明生南京大学社会科学処長、同政府管理学院教授、陳蘊茜南京大学人文社会科学高等研究所院長補佐、同歴史系教授等一行8名が、平成23年12月6日(火)、高等研究院を訪問しました。同院は、中国の大学に先駆けて2005年に設立された人文科学中心の組織です。当日は、安藤副院長と蔡専任教員が高等総合研究館カンファレンスホールにおいて応対、高等研究院の概要と活動状況について説明した後、周院長による挨拶と来訪者紹介がありました。また、共同研究の推進等についても議論しました。次いで、豊田講堂特別会議室に移動し、杉山寛行理事、渡辺芳人副総長、多和田眞経済学研究科科長、水田洋本学名誉教授、斎藤専任教員、大塚雄太助教と合流し、研究交流の可能性等について懇談しました。引き続き、中央図書館に移動し、水田名誉教授と中井えり子附属図書館研究開発室研究員から水田文庫について説明を受け、中央図書館貴重書室を見学しました。



記念撮影

受賞ニュース

中西 聡先生、「日本学士院賞」を受賞

高等研究院院友の中西聡先生(大学院経済学研究科教授、平成17年度研究プロジェクト採択)が、平成24年度の日本学士院賞を受賞されました。この賞は、日本学士院が明治43年に創設され、学術上特に優れた論文、著書その他の研究業績に対して授賞を行っています。今回の受賞対象となった中西先生の研究は、「北前船の商人的活動の実態の究明」です。中西先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院アカデミー会員の赤崎 勇本学特別教授、平成23年度文化勲章を受章

高等研究院アカデミー会員の赤崎勇特別教授が、青色発光ダイオードの基礎技術を確立したことにより、文化勲章を授与されることになりました。文化勲章の親授式は平成23年11月3日に皇居にて行われました。赤崎先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院アカデミー会員の赤崎 勇特別教授、エジソン賞を受賞

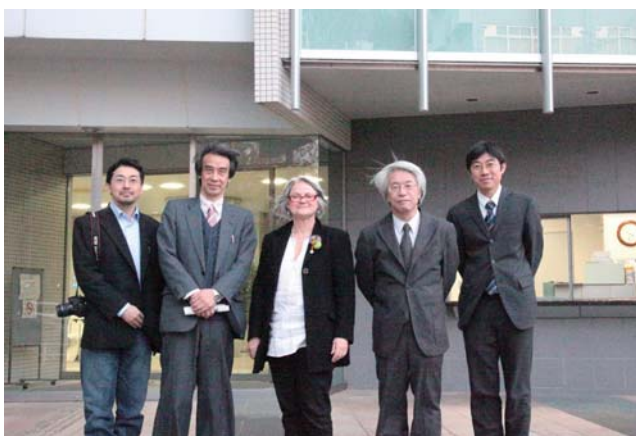
高等研究院アカデミー会員の赤崎勇特別教授が、エジソン賞(Edison Medal)を受賞されました。この賞は全米電気電子学会(IEEE)によって1909年に設立された賞であり、電気電子工学分野で優れた業績を上げた研究者を対象に贈られる賞です。赤崎先生は世界初の高輝度青色発光ダイオードを実現させたことを評価されました。表彰式は平成23年8月20日に米国サンフランシスコにて行われました。赤崎先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展をお祈り申し上げます。



水田先生を囲んで

ブリティッシュコロンビア大学ピーターウォール高等研究院ダイアン・ニューエル院長が来訪

ブリティッシュコロンビア大学ピーターウォール高等研究院ダイアン・ニューエル院長が、平成23年12月15日(木)、高等研究院を訪問しました。同院は、文系・理系を問わず、世界最高水準の研究を推進するために1991年に設立された高等研究組織で、活発な研究活動を展開しています。当日は、近藤院長、安藤副院長と蔡専任教員が高等研究院の概要と活動状況について説明した後、ニューエル院長による挨拶がありました。また、海外高等研究院の最新動向や両院における研究交流の可能性についても議論しました。次いで、中央図書館に移動し、松浦好治附属図書館長から挨拶の後、水田洋名誉教授、中井えり子附属図書館研究開発室研究員と大塚雄太助教から水田文庫について説明を受けました。その後、渡辺芳人副総長と共同研究の推進について懇談しました。



記念撮影

近藤孝男高等研究院長、紫綬褒章受章

政府は平成23年春の褒章受章者を6月15日付で発表しました。高等研究院長近藤孝男先生(大学院理学研究科教授)が、「植物生理学研究」に関する研究業績で、「学術、芸術上の発明、改良、創作に関して業績の著しい方」に贈られる紫綬褒章を受章されました。近藤先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

高等研究院教員の貝淵弘三先生と篠原久典先生が 第64回中日文化賞を受賞

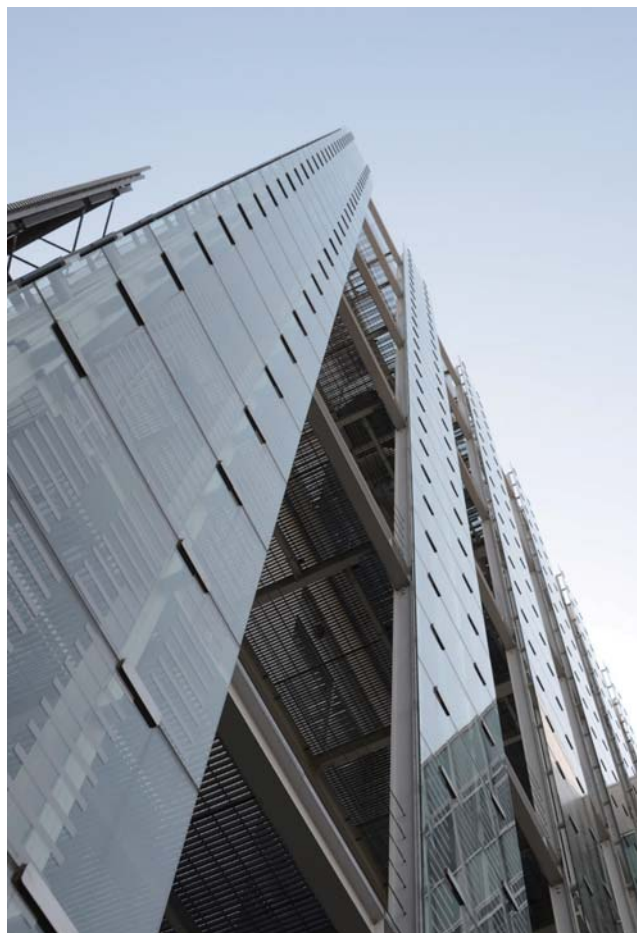
高等研究院教員の貝淵弘三先生と篠原久典先生が第64回中日文化賞を受賞しました。中日文化賞は、学術と芸術の各分野で優れた業績を挙げられ、文化の向上に寄与された個人や団体を顕彰するために、中日新聞社が日本国憲法の施行を記念して昭和22年に制定したものです。貝淵先生は、「Rhoシグナルの発見と関連疾患の病態解明」に関する研究業績で、また、篠原先生は、「ナノカーボン・ハイブリッド物質の創製」に関する研究業績で受賞されました。貝淵先生、篠原先生の今後の益々のご活躍と研究のご発展を心からお祈り申し上げます。

人事について

平成23年4月30日付けで坂神洋次副院長が退任され、同年5月1日より、新たな高等研究院副院長として杉山直教授(理学研究科)にご就任いただいております。

運営費について

本院は現在のところ、学内措置による設置であるため、高等研究院運営費および研究プロジェクト推進経費を財源としています。平成23年度予算は主に高等研究院の運営費や広報費、本院の研究プロジェクト採択者、専任教員およびテニュアトラック教員の研究支援経費に割り振られた後、有効に使われています。なお、本年度の予算執行の内訳は、2012年度に発行される高等研究院年次報告で公表する予定です。





本院に関する詳細につきましては、高等研究院ホームページ
(URL:<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp>)をご参照下さい。
このURLから高等研究院パンフレットもご入用になれます。



本誌に関するご意見・ご要望は高等研究院事務局までお寄せ下さい。

TEL:052(788)6051 FAX:052(788)6151

E-mail: iar@post.jimu.nagoya-u.ac.jp